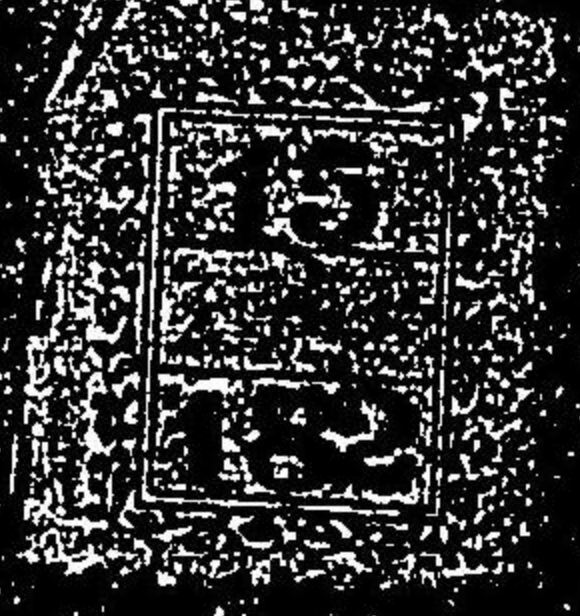


方丈記



095802-000-0

15-182

冠註傍解方丈記

星野 忠直/注

M25

DBR-0009



15
182

冠經
傍解

方丈記

卷之三

完

東京圖書館

一	四	一		
八		九		
冊	號	架	函	類門

№1696/XT

帝國大學東洋學部

星野直先生解詁

尉詁
傍解
方丈記
完

大坂圖書出版會社發行

緒言

この方丈記は、鴨長明の作なり、長明、幼名を菊太夫、また南太夫ともいふ。父長繼にいたるまで、累世山城國加茂社の禰宜たり。七十七代二條天皇の應保年中に、從五位下に叙せられぬ。降て七十八代高倉天皇の御宇に、祖先來世襲の社司に補せらんことを請ひてその事かなはざりしかば、そを憤れるのあまりに、世を遁れ薙髮して蓮胤と稱し、洛外大原の里に高臥せり、新古今集に、身の望みかおひ侍らで、やしるのまじらひもせて、こもりゐて侍りけるよ、葵を見てよめる見れば先いとゞ涙もろるかづらいかに契りてかけはな

なれけん

とあるはその頃の作なるべし。後八十一代後鳥羽天皇和歌所を置きたまふにたよんで、寄人の一人にすゑられしが、其意にあらざりけん。在ること忘ばしにして辭職す。その後事あり將軍實朝卿に招かれて、たゞく鎌倉に下向し、將軍に謁見しまつりしが、程なく歸り來て、更らに居を日野の外山に卜し、悠々自適また世塵に向て待つことなく、終りをまたくせられぬ。行年六十三歳なりとぞ。長明、和歌管絃の道に長じ、はた夙に唯識止觀のむねをまなび、老莊の道に達して、空蟬の世のはかなきことを觀じ、晩年よいたりて

はその念いよく深くつひにこの方丈記をものして詳らよその所懐を叙述し、暗に世の名利に汲々たるものぞいましめぬ。その胸襟の光風霽月なること、この書をよむものはたもひ忘れぬべし。この他著すところの書は、無名抄、瑩玉集、文字鏤、發心集、四季物語、家集あり。この道に上手なりければ、千歳集をはじめ、あまたの勅撰集にいれるものたほし。方丈記てふ題號のゆゑよしはその住家を記せる條に、その家のありさま尋常にも似ず、廣さは僅に方丈、高さは七尺がうちなり。とあるによれるなるべし。方丈とは、すなはち廣さ一丈四方をいふ。なほその處に

つきて、よみしるべきなり。
 さてこの書は、卷の初にあるごとく、長明が物の心を
 知りしより以來、四十あまりの春秋を送れる間に、た
 びく世の不思議を目撃しつることどもを、ありの
 まゝに記せるものなれば、これぞ正しき記事文なり
 ける。たほかた和文としいへば、なまめきたることば
 又は耳とほき古言のみをもて、書きつらねたるもの
 いとたほかれど、此書はさることすくあく、一種の特
 色ともいふべきは、筆づかひのをしきことなり。養
 和の飢饉の條のごとき、尤もそのしかるを知る。そも
 く記事文は、事物の形状たよび、その性質を記すも

のなれば、注意すべきは、あまりに形容して、そがため
 よむねとする事がらを、にかきつくさざるにあり。あ
 はれ、この書をよむものは、さたもひて熟讀玩味せん
 にえ、他日筆をとるにあたりて、いかよ開けゆくわが
 大御代の、くさぐさのことをも、難なくかきいづべき
 なりかし

わがこの冠註傍解は、山岡元隣ぬしの方丈記頭書、榎
 島昭武ぬしの方丈記流水抄、はた、京の水、拾芥抄ども
 によりて物しつるなり。

傍解、京城坊保の圖解のごときは、初學のものとは煩は
 しくたもふならめど、唯、京城の條里のつもり方とや

つきてよみしるべきなり。
さてこの書は、卷の初にあるごとく、長明が物の心を
知りしより以來、四十あまりの春秋を送れる間に、た
びく世の不思議を目撃しつることどもを、ありの
まゝに記せるものなれば、これぞ正しき記事文なり
ける。たほかた和文としいへば、なまめきたることば
又は耳とほき古言のみをもて、書きつらねたるもの
いとたほかれど、此書はさることすくなく、一種の特
色ともいふべきは、筆づかひのをしきことなり。養
和の飢饉の條のごとき、尤もそのしがるを知る。そも
く記事文は、事物の形状によび、その性質を記すも

のなれば、注意すべきは、あまりに形容して、そがため
よむぬとする事がらと、ひかきつくさるにあり。あ
はれ、この書をよむものは、さたもひて熟讀玩味せん
にえ、他日筆をとるにあたりて、いかよ開けゆくわが
大御代の、きさぐのことも、難なくかきいづべき
なりかし
わがこの冠註傍解は、山岡元隣ぬしの方丈記頭書、榎
島昭武ぬしの方丈記流水抄は、た、京の水、拾芥抄ども
によりて物しつるなり。
傍解、京城坊保の圖解のごときは、初學のもの煩は
しくたもふならめど、唯、京城の條里のつもり方とや

うに、注解したりともなかくよく了解しかたかるべしとたゞひて、抜きで、示したるよなん。さて大内裏御圖、花洛往古圖をもあえせてとおもひつれど、煩雜をたそれて省きつるなり。

明治廿五年十一月 星野忠直とるす

冠註 方丈記

星野忠直註

行く川のながれは絶えずして、しかも本の水にあらず。よどみにうかぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、ひさしくとどまることなし。世中にある人とすみかゝり、またかくのことし。玉志きの都のうちには、むねをあらべいらかきあらそへる、たかきいやしき人のすまひ、代々を経てつきせぬものなれど、これをまこととたづぬれば、むかしありし家、はまれなり。あるは去年やけ、今年ハ作り、あるは大家ほろびて、小家とな

行く川の流は云々 夜たえまなく流るゝ水 には復たかへらずして 常に廻りゆくとなり

玉志きの都の枕詞に 玉志きとは心と玉を 敷きつらねて美施なる といふ

あらしめる 都の人家 楯比したる休をいふ

冠註傍解方丈記

水の泡にぞ似たりける
上にいへるよきみに
うかぶうたかたのかつ
きたかつむすふ体に似
たりとの意なり
いづ方へか去る 疑問
のかはすべて上に何幾
誰いつといふが如き何
の格を受けるなり故にい
づ方へやといひてはか
なはぬなり
あるじとすみかと 主
と家となり
無常をあらそひざる
はかなくなりて何れも
永くこの世にあらざる
ことなり
朝顔の露にことならず
あるしとすみかとの
はかなきを比へたるな
り
ゆふへをまつことなし
夕へまで保つことば
なくやがて消ゆるとの
意なり
物の心 物のあはれな
り

る。住む人もこれにおなじ。ところもかはらず、人もれ
ほかれど、いにしへ見し人は、二三十人が中に、はつか
にひとりふたりなり。あしたに死し、ゆふべに生るゝ
ならひ、たゞ水の泡にぞ似たりける。知らず、生れ死ぬ
る人、いづ方より來りて、いづ方へか去る。又知らず、か
りのやどり、誰が爲にか心をなやまし、何によりてか
目をよるこぼしむる。そのあるじとすみかと、無常と
あらそむざるさまいは、朝顔の露にことならず。あ
るハ露れちて花のこれり、残るといへども、朝日よか
れぬ。あるは花はよほみて、露なほ消ぬず。消ぬぞとい
へども、ゆふべをまつことなし。およそ物の心を知れ

四十あまりの春秋を送
れる 四十又餘歳を
歴したるとの意なり
やゝたび／＼になりぬ
やゝは餘程の意なり
安元三年 高倉天皇の
年号なり
いぬゐ 西北の方をい
ふ
かりや 假りにつくり
たる家なり
なん 臥にはぞといふ
物ををし定めていふこ
とばなり

りしよりこのかた、四十あまりの春秋を送れるあひ
だに、世の不思議を見ること、やゝたび／＼になりぬ
去にし安元三年四月廿八日かとよ、風はげしく吹き
て、まづかならざりし夜、いぬの時はかり、都のたつみ
より、火いできたりて、いぬゐに至る。ばてにハ朱雀門、
大極殿、大學寮、民部省などまでうつりて、一夜のほど
に、塵灰となり、いき火本ハ樋口富小路とかや、病人を
やどせるかりやより、いできたりけるとなん

朱雀門 七間五戸 皇城南面中央の正門なり南の廣路は朱雀通 今千本通といふ 南方洛中
の封境に羅城門ありと京の水にみゆそもくこの門は羅城應天の二門と
もに平安城の三門と稱す
大極殿は正殿の名八省院といふ是れなり又之を最大殿といふ又云く八省

とくうつりゆく 火の
手の先きより先きに疾
くうつりゆくなり
むせぶ 嘔咽
ひたすら 偏に、ひた
ぶるといふも同じく物
のあるかたに傾きたる
をいふ故にひたすら願
ふといへどそのことを
のみ願ふなり

うつし心 現心にてこ
の世にあることなるなり
資財をとりいづるにお
よばず 貨財をとりい
だす速なきなり
七珍万寶 種々の寶物
をいふ
さながら そのまゝな
り
いくそばく 糖何芒寶
に數へられぬほどの意
なり
公卿 三位以上の人を
いふ
三分が一 三つに分ち
たるその一分なり
邊際をしらず 敷かぎ
りなきをいふ
人のいとなき 世の人
の生活するわざをいふ
おろかなる この世は
假りの世なれば生を食
るいとなきの益なきに
そを爲すはおろかなり
となり

院は天子臨朝即位諸司告朔の所或は朝堂院と號すと拾芥抄にみゆ
大學寮 二條の南、三條坊門の北神樂苑の
西、南北二町東西一町の間なり 此所は唐の國子監に准して帝都の御學問
所なり

遠近の諸生こゝに集り食物薪等は 天子より賜ふ寮の内には東西の二曹
あり東曹は管丞相の御流義あり西曹は大江維時の流義なりと京の水にみ
ゆ

民部省は中務式部治部兵部刑部宮内大藏とにも八省と稱す拾芥抄に縦
は西洞院横は春日東北の角なりとあり

樋口富小路、樋口は東西の條富小路は南北の條なり京の水に樋口は廣四
丈今万壽寺通といふとあり

吹きまよふ風は、とくうつり行くほどに扇をひるげ
たるが如く、すゑひるになりぬ。遠き家は、けぶりにも
せび、近きあたりハ、ひたすらほのほを地よ吹きつけ

たり。空には灰をふきたたれば、火の光に映じて、あ
まねく紅なる中に、風にたへず吹ききられたる炎、飛
ぶがごとくにして、一二町をこぼつゝ、うつりゆく。そ
の中の人、うつし心あらんや。あるひは烟にむせびて
たふれふし、あるひは炎にまぐれて、たちまち資財を
とり出するまねよばず。七珍萬寶、さながら灰燼となり
にき。そのつひにいくそばく。このたび公卿の家十
六焼けたり。ましてその外は、かぞへしるすに、ねよば
ず。すべて都の中、三分が一におよべりとぞ。男女死ぬ
るもの數千人、馬牛のたぐひ、邊際を知らず。人のいと
なみ、皆れるかなる中に、さしも危ふき京中の家をつ

あぢきなく、味氣なき
なり何の樂みもなきを
いふ

中御門京極 いづれも
東西にありて、は大方
をさしてひたるなる
べしなほ下なる四の京
の傍解をみてその位地
をささるべし

侍る すべて對話の時
にもちひる辞なり

法承四年 安元三年改
元して治承といふ高倉
天皇の御宇なり

卯月 卯花月にして四
月の異名なり

辻風 暴風をいふつむ
じ風ともいふなり

いかめしく 嚴しくな
り勢のたけしきをいふ
かけて 兼てなり

けた 屋根の横木なり

檜皮ぶき 檜の皮もて
葺きたる家をいふ

鳴りよむ 鳴り響く
地獄の業風 地獄にて
常に吹く暴風をいふ
なり

かばかりに こそはとそ
おぼゆる 斯程烈くは
吹くまじとおぼゆると
なり

かたはづける 片輪づ
けるにて不具なるこ
となり

ひつじさるのかた 雨
西の方をいふ

かゝることやはある
此のこゝろは、反動をわ
らはずなり

さるべきものいさとし
何事か然るべきもの
い起る光なるべしと
嘆息したるなりかなは
感嘆の辞なり

おなじ年の水無月 治
承四年の六月なり水か
れてなくなるゆゑに六
月をみなつさといふ
なり

都うつり 攝津國福原
に都遷りをいふは平
相國清盛の意にてた
るなり

くるとして、寶をつひやし、心をなやますことば、すぐれ
てあぢきなくぞ侍るべき。又治承四年卯月廿九日中
御門京極のほどより、大なる辻風たこりて、六條わた
りまで、いぢめしく吹きけること侍りき。三四町をか
けて、吹きまはるまゝに、その中にこもれる家ども、大
なるも小さきも、一つとしてやぶれざるはなし。さな
がらひらにたふれれるもあり。けたハしらばかりの
これるもあり。また門の上を吹きはなちて、四五町が
ほどにたき、また垣をふきはらひて、隣とひとつにな
せり。いはんや家のうちのたから、數をつくして空に
あがり、檜皮ぶき板のたぐひ、冬の木の葉の風にみだ

るゝがごとし。塵を烟のごとく吹きたてたれば、すべ
て目も見ぬ。たびたゞしく鳴りとよむ音に、ものい
ふ聲もきこぬ。かの地獄の業風ありとも、かばかり
にこそハとぞたぼぬける。家の損亡するのみならず、
これをとりつくるふあひだに、身をそこなひてかた
はづけるもの、數を知らず。この風、ひつじさるのかた
にうつりゆきて、たほくの人のなげきをなせり。辻風
は常々吹くものなれど、かゝることやはある。たゞ事
にあらず、さるべきものゝきとしかなとぞ、うたがひ
侍りし。又たなじ年の水無月の頃、よはかに都うつり
侍りき。いと思ひの外なりしことなり。おほかたこの

この京平安城をいふ
嵯峨天皇の御時都と定
りける歴史相違
せり何故にかかき
りけんおぼつかた
は傍解を参考すべし

京のはじめを聞けば、嵯峨天皇の御時都とさだまり
にけるより後ずてに數百歳を経たり

皇都を遷し改めたまふことは上古に於ては代々の帝庸ならずして人皇廿
七代繼體天皇は山城國筒城郡に遷都し給ふこれ當國に於て皇居の首あり
又聖武天皇の御宇天平十二年十二月山背國相樂郡恭仁郷に遷都あるべし
とて右大臣橘宿禰諸兄公をして帝城を造らしめ賀世山の西の道より東
をもて左京とし西を右京とし給ふこと續日本紀にみえたりこれ當國皇居
の第二なり而后星曆四十四年を経て延曆三年甲子五月五十代の帝桓武天
皇勅し給ひて從三位藤原朝臣種繼左大辨佐伯宿禰今毛人等を山城國心訓
郡を見せしめ都をうつし給んとて同年六月宮城造營の調度を諸國に命じ
同き十一月天子新宮に行幸し給ふこれを長岡都と稱す 今洛西大原野上羽村に
内裏の舊跡あり委は都
各所圖合
に見ゆ 遷都の後此地に大内裏を造營わらんと御慮を回らされたまへれど
も封境狭小にして九重をひらくに足らず故に同帝の御宇延曆十二年に詔

ことなるゆゑなく
非常のことにあらざ
遷都はなきなり

ありて大納言藤小黑磨左大辨古佐美等に此國の勝地を視せしむ勅に従ひ
こゝかしの郡縣をめぐりて上奏して曰く當邦宇多村は地勢都々として
四神相應し有徳無疆の皇州なり速に新都を闢き帝城を造らしめ給はゞ万
代不易の都ありとぞ申ける因是同年二月辛亥の日參議治部卿壹志王を加
茂太神に遣しめて遷都のよしを告給ひ同じき三月己卯の口天皇葛野郡宇
多村に行幸ありて新京の地理を親覽し給ひ五位以上及び諸司主典をして
役夫を進め新都の宮殿を造立し九重をひらき四方の洛域には隍を堀らせ
殿を興し絶たるを繼ぎ鶉業を潤色し玉ふ同十三年十一月詔ありて此國は
山河襟帶し自然と城をなす故に山背の文字を改められ都を平安城と號け
給ひける事國史にみえたり又和歌にはたましきたいらのみやことと詠れ
しなり云々京の水にみゆ

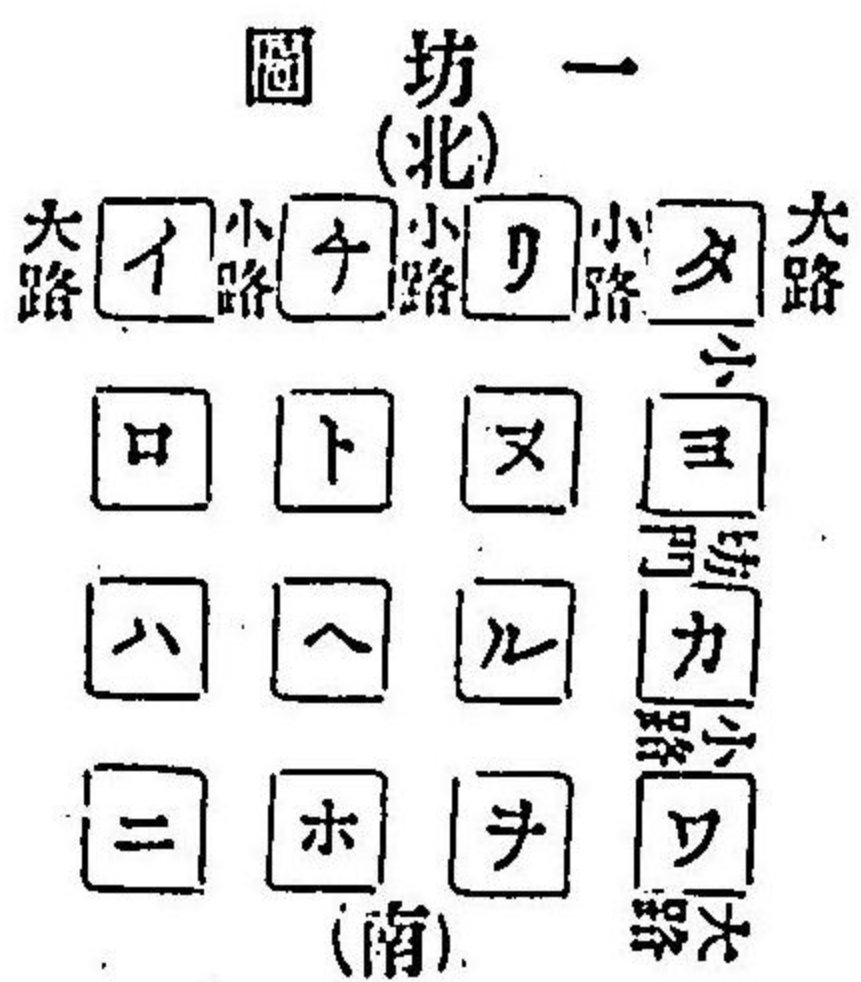
ことなるゆゑなく、たやすくあらたまるべくもあ
らねば、これを世の人たやせからせうれへあへるさ

主君のかげをたのみ
 主君の世に際によりて仕
 官なしある人なり
 世におなされて期する
 ・なきもの世に用ひ
 られずして仕官の目的
 なきものをいふ
 とまりをり 故郷即ち
 平安城に留りて居る
 なり
 淀川にうかび 家をこ
 ぼちて淀川より攝津國
 船原の京へ運濟するを
 いふ
 牛車 三位以上の人の
 用ひる乗物なり

まことわりにも過ぎたり。されどかくいふかひなく
 て、御門よりはじめたてまつりて、大臣公卿、ことごと
 く攝津國難波の京に遷りたまひぬ。世につかふるほ
 どの人誰かひとり故郷よのこりせらん。つかさくら
 めにたもひをかき、主君のかげをたのみほどの人は、
 一日なりとも、とくうつらんとはげみあへり。時をう
 しなひ、世にあまされて、期する所なきものは、うれへ
 ながらとまりをり、軒をあらうひし人のすまひ、日を
 経つゝ、あれゆき、家はこぼたれて淀川まうかび、地は
 目の前に畠はたけとなる。人の心みなあらたまりて、馬鞍うまくらを
 のみたもくす。牛車うまぐるまを用とする人なし、西南海の所領しよんりやう

四行の體之後世に至りても、諦に分れり、横通よこどおと平安城開闢の條に變
 らず、縦通たてどおと上古にかたりて、悉く小路の數倍せり、今存在の鉄屋町堺
 町間之町車屋町而替町衣棚釜之座小川醒井岩上新シ町これらの類後
 世におよんで出來たり、是四行の間に一小路を設くる式文の證あり

一保といふは前の四行の圖を四ッ目結の如く
 四ッ合て二町四方なり、たとへば三條の北側よ
 り姉小路を越て三條坊門今八幡町の南側まで
 室町の東側より烏丸をこえて東洞院の西側ま
 で此四町を一保と號く、これも唐の代の制あり
 左京西は北よりかぞへ右京は東北より算ふ



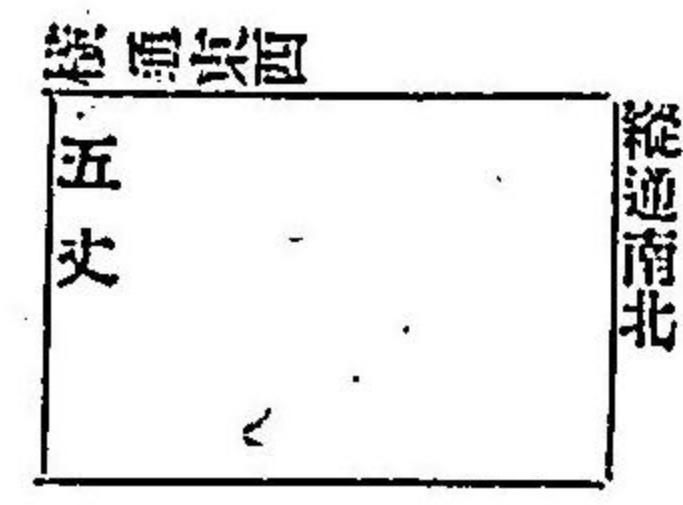
一坊といふは前の一保の圖を又四ッ目結
 のごとく四ッ併せて二町四方町十六町な
 り、縦横とも外側を大路にて中に小路三筋
 あり、此三筋の中の筋を坊門通といふ、九重
 ことごとくくばりて一坊二坊三坊四坊あ
 り、左京は西より始り、右京は東よりとじま
 る

庄園の時めく人の所領は
 地なり東北國の領に
 ざる故よしは京所領に
 は大かた源の京所領に
 してはたけのたより
 便利はからしむるなり
 おりてわさとなりぬ
 事のついでありたりぬ
 餘里をわにたらしむる
 今の福原の地たるを
 狭くして條里の積を
 たつて能はずとを
 りなるは傍解をみて
 まふべし

そのみねがひ、東北國の庄園しやうげんとばこのまづ。その時、た
 のづから事のたよりありて、攝津國今の京に至れり。
 所のありさまを見らば、その地ほど狭くて、條里をわ
 るよたらざ。

凡一條の内に四坊あり一坊の内に十六町あり十六町の内に四保あり一町
 の内に四行あり一行の内に八門あり云々と拾芥抄にみゆ今京の水に所載
 の京城坊保の積をぬきで左に記す

京城坊保の圖解 坊保の積は民家 一月より起る



一門といふは間口五丈奥行十丈と定たる法令にして
 縦横の町に拘らず民家一戸のことなり今俗にいふ
 一軒役等に當る左京は皇城の方西北より算へ始
 り右京は東北よりかぞへはじまる

圖の門二 卅行四 圖の門八行一

十丈 北門一	十丈 北門一	十丈 北門一	十丈 北門一
十丈 北門一	十丈 北門一	十丈 北門一	十丈 北門一
十丈 北門一	十丈 北門一	十丈 北門一	十丈 北門一
十丈 北門一	十丈 北門一	十丈 北門一	十丈 北門一
十丈 北門一	十丈 北門一	十丈 北門一	十丈 北門一
十丈 北門一	十丈 北門一	十丈 北門一	十丈 北門一
十丈 北門一	十丈 北門一	十丈 北門一	十丈 北門一
十丈 北門一	十丈 北門一	十丈 北門一	十丈 北門一
十丈 北門一	十丈 北門一	十丈 北門一	十丈 北門一
十丈 北門一	十丈 北門一	十丈 北門一	十丈 北門一

(北) 幅一町の内は小徑を開く時はこの筋なり (南)

(北) 五丈 五丈 五丈 五丈 五丈 五丈 五丈 五丈 五丈 五丈

(南) 十丈 十丈 十丈 十丈 十丈 十丈 十丈 十丈 十丈 十丈

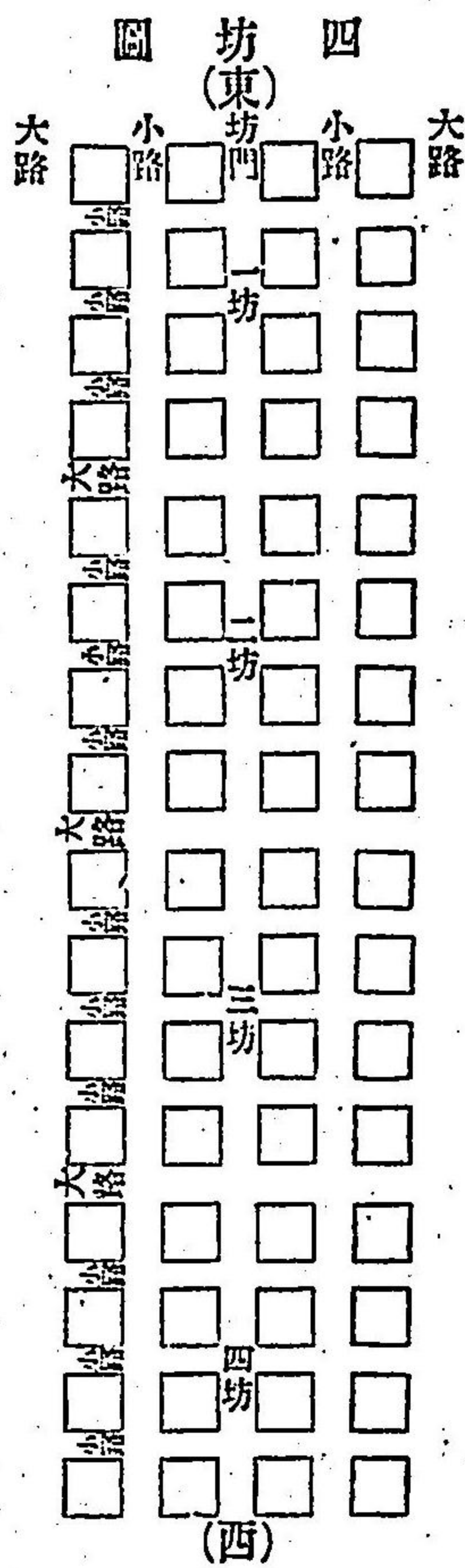
横通壹町の長さ四十丈を四ツに截て
 十丈を一行といふ縦通壹町の長さ四
 十丈を五丈づゝきりて八門といふ今
 の町屋片側の積なり左京は西北より
 算へ右京は東北よりかぞふ

此圖之壹町にして四十丈四方なり前
 の圖の縦通四十丈を八ツに截りて八
 門とし横通四十丈を四ツに截りて四
 行とす此四行に八門を配すれば三十
 二門となる田地の何反幾畝なといふ
 如きなり左京は内裏の方西北より算
 へ右京は東北よりかぞふ

内裏 皇居のことなり
木丸殿もかくやと
佐國土佐郡朝倉村なる
天智天皇の行宮なりけ
る木丸殿もかく今の京
の内裏のことなり
ありけんとなり
なかくやうかはりて
却て様かはりておも
しるべきなり
川もせきあへず 川も
塞ぎとめあへずなり

故郷は京都は山
平の京をいふ
原の京をいふ
ありとしわんが世の
人みなといはるる如し
すべからざるなり
強くなるなり雨ふるときは
ふる風ふきにふくとい
ふが如し
浮雲のおもひをなせり
こせざる定めざるが
堵せざる定めざるが
この所にをれるもの
従來の福原に住居し
るたものといふ
土木のわづらひ 家造
りのわづらひなり
衣冠の公卿の正服にし
て束帯の衣なり
布衣の衣の衣なり
直垂の衣の名武官の着
る服なり
都のてふりてふりは
風俗なり 田舎風め
ひなびたる 田舎風め
きたるなり
瑞相 前兆とおなしく
きざしをいふ
しるく 著くにて分明
なり
おなじし年の冬 治承
四年の冬をいふ

四坊といふ之前の一坊の圖を横に四ツ並べて東西十六町に南北四町を四坊
といふ三筋の小路の真中を坊門通とし此四坊を九ツ併せたるを九重といふ
北は山にそひて高く、南は海に近くて下れり。波の音
つねにかまびすしくて、潮風ことにはげしく、内裏は
山の中なれば、かの木の丸殿もかくやと、なるくや
うかえりて、優なるかたも侍りき。日々にこぼちて、川
もせきあへず、はこびくだす家は、いづくに作れるよ
かあらん。なほむなしき地は多く、造れる屋はすくな



し。故郷はずてにあって、新都をいまだ成らず。ありと
しある人は、みな浮雲のたもひをなせり。もとよりこ
の所よをれるものは、地をうしなひてうれへ、今うつ
り住む人は、土木のわづらひあることを歎く。道のほ
とりに見れば、車に乗るべきは馬に乗り、衣冠布衣な
るべきは、多く直垂を着たり。都のてふりたちまちに
あらたまりて、たゞひなびたる武士にことならず。こ
れは世のみだる、瑞相とか聞きかけるも、さるく、日
を経つゝ、世の中うきたちて、人の心もささまらぞ。民
のうれへつひにむなしからざりければ、同じき年の
冬、なほこの京よかへり給ひにき。されどこぼちわた
せりし家ども、いかになりけるにか。ことごとくくも

この京にかへりなきへ
平安京にふたゝびかへ
りたるとなり
はのか 勢能と書くほ
んのか 又、ちよつとの
意なり
かしてき 賢聖の御代
代をいふ 賢聖の御代
御殿に芽をふき云々
仁徳天皇の御事をいへ
るなり

養和 安徳天皇の年號
あり

あさましきこと 甚だ
おどろくべきことなり

冬收むる 冬になりて
どりいるをいふ
ぞめき 騒ぎなり

このやうにしも造らず。ほのかに傳へ聞くに、いにし
へのかしこき御代に、あえれみをもて國を治めた
まふずなはち御殿に芽をふきて、軒をだにもととの
へず。煙のともしきを見たまふ時は、かぎりあるみつ
ぎものをさへ免されき。これ民をめぐみ世をたすけ
たまふによりてなり。今の世の中のありさま、むかし
にならずらへて知りぬべし。又養和の頃かとよ、久しく
なりて、たしかにもたげぬ。二年があひだ、世の中飢
渴して、あさましきこと侍りき。あるひハ春夏日てり、
あるひは秋冬大風大水など、よからぬ事どもうちつ
ゞきて、五穀ことぐくみのらずむなし。春耕し、夏

これによりて云々
く年珍らす事、國のわま
り安堵することわは
すて諸國に流離するを
いふ
なべてならぬ法、ひと
みなりならぬ所、ひと
みなりとは云々、一粟穀
その他をわゆるもの、一
切のものを田舎に仰
ぐにこのころは何も持
て上らざるなり
さのみやはみさをもつ
くよりあへん、今までの
ごとく田舎より持ちて
上るを待つたへかね
て也
念じわびつゝ、この事
をのみ心配して也
捨るがごとくすれども
なり 捨てうりにすれども
なり
目みたつる人もなし
さまざまの寶物に目を
つけてみる人もなしと
なり。そは今日の糊口に
苦めばなり
たちなほる 饑饉の悪
年さうりて目出度年とな
るかとなり
あまさをえやみうちそ
ひ云々 饑饉に疫病さ
へそはりてなかく、前
年より人の死するこ
とおびたしとなり

植うるいとなみのみありて、秋刈り冬收むるぞめき
はなし。これによりて、國々の民、あるひは地を捨て、
塚をいで、あるひは家を忘れて山に住む。さまざまの
御祈はじまりて、なべてならぬ法ども行はるれども、
さらにその志るしなし。京のならひ、何わざにつけて
もみなもとハ田舎をこそたのめるに、たえてのぼる
ものなければ、さのみやハ、みさをもつくりあへん。念
じわびつゝ、さまざまの寶物、かたはしより、捨つるが
ごとくすれども、さらに目みたつる人もなし。たまた
まかふるものは、金をかるくし、粟をたもくす。乞食道
のほとりにたほくうれへかなしぶ聲、耳に満てり。前

きはまりゆくさま少水
 の魚のたどへにかなへ
 り日敷ふるに遠くは
 漸く前途の近くは水の
 少く死するより外なき
 頼て死するより外なき
 ことをいひたるなり
 家を前に乞ひたり
 食を門前に乞ふことな
 りわびしれたる者しれ
 は正体なきをいふこと
 らては糊口菜つきてあ
 らぬ姿になりたるもの
 なり
 ついひぢのつら土も
 て築きたる垣のものを
 いふ
 かはりゆくありさま
 取りすつるわざなけれ
 ば屍骸のおひくはく
 されもてゆくといふ
 目もあてられぬ見
 り忍びざるものおほく
 わりとなり
 あやしきしづ山がつ
 腹男女樵夫などといふ

の年かゝのごとく辛くして暮れぬ。明くる年は、たち
 なほるべきかとたもふほどに、あまきへひやみうち
 そひて、まさるやうにあとかたなし。世の人みな飢ゑ
 死にければ、日を経つゝきはまりゆくさま、少水の魚
 のたとへにかなへり。はては、笠うち着足ひきつゝ
 み身よるしき姿したる者むたすら家ごとくに乞ひあ
 りく。かくわびしれたる者ども、ありくかと思れば、す
 なはちたふれふしぬ。ついひぢのつら路のほとりに
 うゑ死ぬるたぐひは、數も知らずとりすつるわざも
 なければ、くさき香世界にみちくゝて、おはりゆくか
 たちありさま、目もあてられぬ事おほかり。いはんや

一日が命をさふる
 足らす薪の料にだに
 かる薪の中は丹つき
 云々薪の市に丹つき
 堂のつきたるは薪り
 しまが故に佛像をぬす
 む堂の物の具をやぶる
 たりて割り碎けるもの
 なればなり
 計の策つきて詮方なき
 ものをいふ
 濁悪の世 濁悪の末世
 といはんが如しもの
 しは助成なり
 さりがたき 離しかた
 く大切におもふことな

川原などには、馬車のゆきちがふ道だにもなし。あや
 しきまづ山がつも、方つきて薪さへともしくなりゆ
 けば、頼むかたなき人は、みづから家をこぼちて、市に
 いて、これを賣るに、一人がもちて出たるあたひ、な
 ほ一日が命をさふるに、だに及ばずとぞ。あやしき
 事は、かゝる薪の中に、丹つき白がね、黄金の箱などと
 ころとにつきて見ゆる、木のわれ、あひまじれり。こ
 れをたづぬれば、すべき方なきものゝ、古寺にいたり
 て、佛をぬすみ、堂の物の具をやぶりとりて、わりくだ
 けるなり。濁悪の世にしも生れあひて、かゝる心うき
 わざをなん見侍りし。又いとあはれなる事侍りき。

おもひまさらりて深きは
おのれ先きに死してそ
の喰ふところの分を隠
りて生をさするなり
いたはしくおもふかた
大切におもふなり
さだまれるならひ
さきだちて死するなり
大藏卿隆曉法印 法顯
三藏をといふことく大
藏卿は呼名にして八省
の一人なる大藏省の卿に
はあらす法印は僧官の
名なり

聖をおまたかたらひつ
達におはく徳高き僧
その首のみゆること
死したるもの見わ
たり次第一ものことさ
なり
額に阿字を書きて云々
なり成佛のさしめんど
なり成佛のさしめんど
田中下阿字一刀生刃
涅槃亦断とあるに由
縁を結ぶとは佛に所
結糸にして佛に縁を結
ばしむることをいふ
川原 今の鴨川にて左

京の京極即ち今の寺町
通りの外にあり

もろくの邊地 諸近
在をいふ
際限 數かぎりをいふ
七道 東海 東山 陽山
陰北 陸南 海西 海をいふ

りがたき男女などもちたるものは其たもひまさらり
て深きはかならざさきだちて死す。そのゆゑは、わが
身をばつぎになして男にもあれ、女にもあれ、いたは
しく思ふがたに、たま〜乞ひ得たる物を、まづゆつ
るによりてなり。されば親子あるものは、さだまれる
ならひにて、親ぞさきだちて死にける。父母が命つき
て臥せるを知らざして、いとけなき子の、その乳房に
吸ひつきつゝ、ふせるなどもありけり。仁和寺に、慈尊
院の大藏卿隆曉法印といふ人、かくしつゝ、數知らず
死ぬることをおなしみて、聖をおまたかたらひつゝ、
その首の見ゆることに、額に阿字を書きて、縁を結ば

しむるわざをなんせられける。その人數を知らんと
て、四五兩月がほど數へたりければ、京の中、一條より
南、九條より北、京よりは西、朱雀よりは東、道のほとり
にある頭をべて、四万二千三百餘なんありける。いは
んや、その前後に死ぬるものも多く、川原、白川、西の京
西の京と右京をいふ京の水に曰く左京、右京の廣き東西の條三十二町に
南北の條三十八町あり、朱雀通今の千本通なり北に朱雀
門あり南に羅城門あり、左京、右京の間にありて
道幅廿八丈なりこれより東の分を左京とし、左京職これを掌る其中に町數
六百八町保數三十六坊あり、東の端を京極といふ、朱雀通より西の分を右京
とし、右京職これを掌る其中に町數六百八町保數百五十坊數之三十六坊
あり、左京と同じ事にしてこれも西の端を西京極といふ云々
もろくの邊地などを加へていはゞ、際限もあるべ

まのあたり云々 長明
この養和の饑饉の状を
目撃しいと希有に悲酸
にたへざりしとなり
元暦二年 後鳥羽天皇
の年號なり 大地震のこと
大なる 大地震のこと
なり 世の常ならず 希有の
地震なりとなり

いはは 巖なり
清波うちよするきは
をいふ 立所をいふ即
ち居るところなり
在々所々 いづこもお
しなべてなり
一としてまたからず
みな完全なるものはな
しとなり
さかりなる 盛りにな
ちわがる 烟のごとしと
なり

からぞ。いゝにいはんや、諸國七道をや。近くは崇徳院
の御位の時、長承の頃かとよ。かゝるためしはありけ
りと聞けど、その世のありさまは知らず。まのあたり
いとめづらかに悲しかりし事なり。又元暦二年の頃
おほなるふること侍りき。そのさま世の常ならず。山
は崩れて川をうづみ海はかたぶきて陸をひたせり
土裂けて水湧き出で、いはほわれて谷ままるび入り
渚こぐ船は波にたゞよひ、道ゆく駒は足のたちどを
まどえせり。いはんや都のほとりよ、在々所々、舎堂
塔廟、ひとつとしてまたからぞ。あるひはくづれ。或は
たふれぬるあひだ、塵灰たちあがりて、さかりなる、煙

いかづちに その音の
おとろくしきことは
雷鳴のごとしとなり
うしひしげなん 今に
も家の潰れきてその体
のひしがれんかとなり
おそれの中に 最も恐
るべきものは地震なり
となり
ついでに 築城のこと
なり
小家をつくりて云々
幼稚の子どものあそび
るに足らざるわざを
見るとは、おそむしとなり
俄にくづれ云々 地震
の爲めに、俄に築城のく
づれ、その下に埋没して
見る影もなくなりしな
り

のごとし。地の震ひ、家のやぶるゝ音、いかづちにこと
ならず。家の中にをれば、たちまちにうちひしげなん
とす。走り出れば、又地われさく。羽なければ、空へもあ
がるべからず。龍ならぬば、雲にものぼらん事かたし。
たそれの中に恐るべかりける。たゞ地震なりけり
とぞ。たほぬ侍りし。其中にある武士の、ひとり子の、六
七ばかりに侍りし。ついでに、おほひのたほひの下よ、小家
を作りて、はかなげなるあとなし事をして、あそび侍
りしが、俄にくづれうめられて、あとかたなく、ひらに
うちひさぶれて、二つの目など、一寸ばかりうち出さ
れたるを、父母かゝへて、聲もをしまし、悲しみあひて

たけきものも 心の猛
 いとほしく かはゆく
 の意なり
 こどわりかな 子のか
 なしみにほはけきもの
 の道理なりと感嘆した
 るなり
 或は四五度もしくは一日
 ませは一日に四五度若
 しくは隔日にふたりと
 なり
 おはかたそのなごり
 大抵地震の名残が三閏
 月ほどもありしとなり
 四大種 水火風地をい
 ふ
 齋衡 文徳天皇の年号
 なり
 東大寺 南都七大寺の時
 一にして聖武天皇の時
 建立せられたるなり
 みくし 御頭をいふ
 いみじき事 甚しきこ
 となり
 なは ヤハリの意なり
 おちなき事 この世
 の中の無情にしてたの
 ふみにならざることをい

侍りしこそあはれにゐなしく見侍りしか。子のかな
 しみには、たけきものも、聖をわすれけりとたぼはて
 いとほしく、ことわりかなとぞ見侍りしか。かくたびた
 ゞしく震ることば、まばしにやみよしかども、そのな
 ごり、まばく絶えず世のつねにたどろくほどの地
 震、二三十度ふらぬ日はなし。十日廿日過ぎにしかば
 やうくまどほになりて、或は四五度もしくは一日ま
 ぜ、二三日に一度などおほかたそのなごり、三月ばか
 りや侍りけん。四大種の中に、水火風はつねに害をか
 せど、大地にいたりては、ことなる變をなさずむかし
 齋衡の頃かとよ、大なるふりて、東大寺の伽らみぐし

いさ、か心のにこり云
 々、斯く世の詮なきこ
 とにわいて聊か人の愁
 深さこゝろも薄らぐか
 とおもへば、頼りて月日の
 かさなるにつれても、と
 の愁心生じその年をえ
 ければ、話をする人もな
 しとなり
 世のありにくき事云々
 のまも長閑におもふべ
 からざるがごとく、我身
 ずみかも、侍むにたら
 ず、無常の敵はきはひき
 つ、われば塵俗の事に
 心を勞するは至愚なり
 どの意なり
 身のはをにしがひて
 權門分相應になり
 權門 當世にもちひら
 いて榮花衰貴なる家を
 いふ
 深くよるこふ云々、權
 門の庇蔭にて土官しふ
 かくよるこふこぞ、紙の
 れども元とより紙の
 風に侍りて、頼りたるに
 おなじければ、何かこの
 眞の快樂をおぼえずと
 の意なり

落ちなどして、いみじき事ども侍りけれど、なほこの
 たびには、まかすとぞ、ずなはち人皆あぢきなき事を
 述べて、いさゝか心のよごりも、うすらぐかと見しほ
 どに、月日おさなり、年こほしかば、後は言の葉にかけ
 て、いひ出る人だになし。すべて世のありにくき事、わ
 が身とすみかとの、はかなくあだなるさま、又かくの
 如し。いはんや、所により、身のほどにまいたがひて、心を
 なやますこと、いあげて數ふべからず。もしれたのづか
 ら身かなはずして、權門のかたはらに居るもの、ハ深
 くよるこふ事は、あれども、大に樂しふにあたは、まな
 びきある時も、聲をあげて泣くことなし。進退やすか

すばき姿 ずばきは理
しきとて俗にみすばら
しきといふ

なへがしろ 物をもせ
ずあなごることなり
念々に動きて心の暫
時々静かなることなく
時のまも安堵の念なき
といふ

近く炎上する時 其家
近くより火出でたる
時をいふ

守れば 莊子に所謂
富めば則ち亦おほしの
意なり

らず立居につけて恐れおのゝくさままたへば雀の
鷹の巢よちかづけるおととしもし貧しくして富め
る家の隣にぞるものは朝夕すばき姿を耻ぢてへつ
らひつゝ出ていり妻子僮僕のうらやめるさま見る
にも富める家の人のないがしろなるけしきを聞く
にも心念々々動きて時としてやすらかならざもし
せばき地よなれば近く炎上する時その害をのびる
事なしもし邊地にあれば往反わづらひたほく盗
賊の難はなれがたし又いきほひあるものは貪欲ふ
かくひとり身なるものは人にかろしめらる寶あれ
ばおそれたほく貧しければなげき切なり人となつ

いふ 養育するを
世にしたがふ 世の人
に立ちまじりてゆくを
いふ

玉ゆら 暫時のまよふ

縁かけ 祖母失せてそ
のゆかりもなくなりし
をいふ
あといむることを得ず
祖母失せて後は依然
と居ること能はずにな
り
之をありしすまひに云
々々庵を前に住ひし家
にくらふる時にはその
十分の一なりとなり
はかばかくしく殿
字の意なり
つひち 築地をいふ

めば身他のやつことなり人をはこくめば心恩愛に
つかはる世にまたがへは身くるし又またがはねば
狂へるに似たりいづれの所をしめいかなるわざを
してかまばしこの身をやどし玉ゆらも心をなく
さむべきわが身父がたの祖母の家を傳へてひさし
くかの所に住むその後縁かけ身たとるへて忍ぶか
たぐゝまげかりしかばつひにあととむる事を得ぞ
して三十余にして更にわが心とひとつの庵を結ぶ
これをありしすまひまなぞらふるに十分の一なり
たゞ居屋ばかりをかまへてはかどしくは屋をつ
くるにたよばずわづかについひちをつけりといふ

たづきなし 便利なき
 川原 鴨川原をいふ
 白波の 西河なる白波谷
 雅をいふ 後漢に孝
 帝の時 西河なる白波谷
 に邦 奏といふ人の反
 せしやう 盗賊の異名と
 なる風 風ふけば沖つ白波立
 田山よはにや 獨り君が
 白波の 立田山とある歌
 用ひて 盗賊の起ることを
 も取り せせる大家の文
 もらぬ 世 然あらし世
 なり 不運をい
 みじかき 運 不運をい
 よすがもなし 傾りと
 たのむ人もなきをいふ
 何につけても 執をと
 めん 何事につけても
 執若の 念なしとなり世
 事には 至て 淡湖なるを
 いふ 雲に臥す 世塵の事は
 一切 抛ち来りて 塵遊す
 るをいふ 五回をいふ
 五かへり 露云々 晩年に
 六十の 露云々 晩年に
 いたりて 殘生を送るべ
 き宿りをむすべりとす

ども門たつるにたづきなし。竹を柱として車やどりとせり。雪ふり風吹くごとに、あやふからずしもあらず。所ハ川原近ければ、水の難もふかく、白波のたれもさわがし。すべてあらぬ世を念じ過ぐしつゝ、心をなやませることば、三十余年なり。そのあひだ折々のたがひめにたのづからみじかき運をさとりぬ。ずなはち五十の春をむかへて家を出で世をそむけり。もとより妻子なければ、捨てがたきよすがもなし。身に官祿あらず、何につけてか執をとぐめん。空しく大原山の雲に臥して、また五かへりの春秋をなん經にけり。こゝに六十の露消ぬがたよびて、さらに末葉

方丈 一丈白力なり

土居をくみ云々 土壁を敷けそが上に土根をいくばくのわづらひかある 何程の煩雜もなきをいふ

のやどりを結べることあり。いはゞ旅人の、一夜の宿をつくり、老たるるひこの、繭をいとなむがてし。これの中頃のすみかにならずらふれば、また百分の一にだにも及ばずとかくいふほどに、齡ひは年々にかたぶき、すみかはをりくゝに狭し。その家のありさま世の常ならざ。廣さはわづかに方丈、高さは七尺ばかりなり。所を思ひさだめざるが故に、地を志めて作らず。土居をくみ、打覆をふきて、つきめごとよ、かけがねをかけた。もし心になはぬ事あらば、やすく外に移さん。がためなり。うの改め作る時、いくばくのわづらひがある。つむ所わづかに二兩あり。車の力をむくゆ

たづきなし 便利なき
川原の川原をいふ
白波のおそれ 盗賊の
難の時西河なる白波谷
に邪と人なる反世
なりたるは沖古今集に
「風よけは沖若歌
田山よけは沖若歌
白波の立山てふ句を
用ひて盗賊の起る事
も取りなせる大家の文
あらし世 然あらし世
なり
みじかき運 不運をい
ふ
よすがもなし 何れと
何にいつても執をいふ
めんの何事につけても
執着の念なしとなり世
事には至て淡薄なるを
いふ
雲に臥す 世塵の事は
一切抛ち來りて隠す
るをいふ
五かへり 五回をいふ
六十の露云々 晩年いふ
いたりて殘生を送るべ
き宿りをむすべりとす
り

ども門たつるにたづきなし。竹を柱として、車やどりとせり。雪ふり風吹くごとに、あやふからずしもあらず。所ハ川原近ければ、水の難もふかぐ、白波のたれもさわがし。すべてあらぬ世を念じ過ぐしつゝ、心をなやませること、は三十余年なり。そのあひだ、折々のたがひめに、たのづからみじかき運をさとりぬ。すなはち五十の春をむかへて、家を出で世をむけり。もとより妻子なければ、捨てがたきよすがもなし。身に官祿あらず。何につけてか執をとぐめん。空しく大原山の雲に臥して、また五かへりの春秋をなん經にける。こゝに六十の露消ぬがたよびて、さらに末葉

方丈 一丈四方なり

土居をくみ云々 土壁を敷け、その上に土居を敷くをいふ
いくばくのわづらひある 何程の煩雜もなきをいふ

のやどりを結ぶることあり。いはゞ旅人の、一夜の宿をつくり、老たるるひこの、藪をいとなむがごとし。これの中頃のすみかになずらふれば、また百分の一にだにも及ばずとかくいふほどに、齡ひは年々にたぶきすみかはをりくりに狭し。その家のありさま世の常ならん。廣さはわづかに方丈、高さは七尺ばかりなり。所を思ひさだめざるが故に、地を志めて作らず。土居をくみ、打覆をふきて、つきめごとよ、かけがねをかけた。もし心になはぬ事あらば、やすく外に移さん。がためなり。その改め作る時、いくばくのわづらひがある。つむ所わづかに二兩あり。車の力をむくゆ

念佛ものうく云々 念
 佛するを俵服し 念
 心なき時は心のま
 りにするとなり 別
 ことに止らるるに云々 別
 にも居るに身なれば口舌
 のために罪を犯すこと
 禁戒云々 佛の禁戒を
 引くこといふには日々の
 なすことにも禁戒に違は
 ずと云々 跡の白浪に身をよする
 の果敢なきことお身
 ひしりたる朝には霧も
 沙彌の世の中を何にた
 とへん朝ぼらけのぎゆ
 る舟の跡の白浪をよめ
 る歌の風情をぬすむと
 なり
 もし桂の風云々 琵琶
 を細する夕には昔唐の
 白樂天が江州の司馬に
 貶せられたる時の琵琶
 行に桂の古詩のよび本
 朝に桂の中納言信朝の
 ことをおもひて獨り
 古人を擬すと云々 松
 風松のひびきに秋風
 ぬき曲を調和しに秋風
 た

をかなしふと聞ゆ。冬は雪をあはれぶつり消ゆる
 さま、罪障にたとへつべし。もし念佛ものうく、讀經ま
 めならざる時は、みづから休み、みづからたごたるに、
 妨ぐる人もなく、また耻づべき友もなし。ことさらに
 無言をせざれども、ひとり居れば、口業をささめつべ
 し。かならず禁戒をまゝるとし、なけれども、境界な
 ければ、何よつけてかやぶらん。もし跡の志ら浪に、身
 をよするあしたには、岡のやに行きかふ船をながめ
 て、滿沙彌が風情をぬすみ、もし桂の風撥をならす夕
 には、潯陽の江をたもひやりて、源都督のながれをな
 らふ。もし餘興あれば、志ばく松のひびきに、秋風の

てる流水の音に流泉の曲を
 なり 琴曲を奏和すると
 柴の庵云々 柴もて葺
 きたる庵ありてこれに
 はこの日野山の番人住
 めるとなり
 つれづれなる時 徒然
 にある時をいふ
 この外なれど 殊の
 外相違せれをなり
 つばな 茅といふ草の
 名なり
 岩なし
 のかこ 葵餅(山芋)の
 子をいふ
 すそわの田の 山麓な
 る田の中をいふ
 はぐみ 穂穂にて稻の
 はをもてくみたるもの
 なり

樂をたぐへ、水の音に、流泉の曲をあやつる。藝はこれ
 つたなければ、人の耳をよるこばしめんとにもあら
 ず。ひとり調べ、ひとり詠じて、みづから心をやしなふ
 ばかりなり。また麓にひとつの柴の庵あり、すなはち
 この山守が居る所なり。かしこに小童あり、時々來り
 てあひ訪ふ。もしつれづれなる時、これを友として
 あそびありく。かれは十六歳、われは六十の齡こと
 の外なれど、心をなぐさむる事はこれに等し。或はつ
 ばなをぬき、岩なしをとる。又ぬかこをもち、芹を摘む
 或はずそわの田にわたりて、落穂を拾ひて、ほぐみを
 作る。もし日うららかなれば、嶺によちのぼりて、さる

勝地は主なれば、伏見の里、鳥羽、東師をいふ。さてこの勝地は、期集なる白樂天の勝地木來無定主、大郡山、屬愛山人といへる詩の意なり。わゆみわづらひなく、脚力倦ます心の進む時は、山笠取、上なる勝地とおなじく山城にあり。岩間、木寺、観音とて山城にあり。また、栗津の原、石山、田上川、粟津の原とも、近江の國なる勝地なり。蟬丸、猿大夫の和歌の道の上なるは、その歌百人一首にいうて、誰も知らぬものなく、又無名抄には、翁が跡、大夫の墓につきて、聊か記し、わけん、傳記なれば、考ふるによし。なし。わが家の土産なり。

かに故郷の空々望み、木幡山、伏見の里、鳥羽、東師を見。勝地ハ主なければ、心をなぐさむるにさはりなし。あゆみわづらひなく、志遠くいたる時は、これより嶺つゞき、すみ山を越ひ、笠取を過ぎて、或は岩間にまうて、或ハ石山を拜む。もしはまた栗津の原を分けて、蟬丸翁が跡をとぶらひ。田上川をわたりて、猿丸大夫が墓をたづね、歸るさには、折につつゞ、櫻を狩り、紅葉をもとめ、蕨を折り、木の實を拾ひて、かつは佛にたてまつり、かつは家づとにす。もし夜なづかなれば、窓の月に古人を忘のび、猿の聲も袖をうるほす。草むらの螢は、とほく真木の島のかべり、火にまがひ、曉の雨

山鳥のほろく、三々、玉葉集に行基の歌、山鳥のほろく、となく、母かどぞおもふとわりかかぎ、鹿のことなり。

況んや深くおもひ云々、この日野山の閑寂なる、深く佛をおもひ、知れぬ人の爲めに、は今の景氣にかぎらざるなか、の景氣にかぎらざるなか、しどの意なり。あからさま、明白には、あからさま、意なり。あからさま、意なり。あからさま、意なり。

は、たのづから木の葉吹く嵐に似たり。山鳥のほろくとなくを聞きても、父か母かとうたがひ、峯のかせぎの近くなきたるよつけても、世は遠ざかる程を知る。或は埋火をかきたこして、老のねぎめの友とす。おそろしき山ならぬど、ふくるふの聲をあはれぶにつけても、山中の景氣折につけて、つくることなし。いはんや深く思ひ、深く知られん人のためには、これにしもかぎるべからず。大かた、此所に住みそめし時は、あからさまと思ひしかど、今すでに五とせを経たり。假の菴も、やくふる屋となりて、軒に朽葉ふかく、土居に苔むせり。たのづから事のたよりに、都を聞けば、この

のせけくして 安樂に
なして 炎上などの おそれ
なしとなり

がうな 他の貝の殻内
にその生を 寄宿する虫
なり
みさこ 唯鳩といふ鳥
にてよく 魚をとりて食
ふものなり
身を 知り世を知れば
我身とこの世のはか
たき事を知るか故に富
貴利達を求めずとの意
あり
まじらはす 世間の人
に交際せざるをいふ

山にこもり居て後やんごとなき人のかくれ給へる
もあまた聞ゆ。まして數ならぬたぐひつくしてこれ
を知るべからざれば、の炎上にほろびたる家、又
いくそばくぞ。たゞ假の菴のみ、のどげくして祀され
なし。程せばしといへども、夜臥す床あり。晝居る座あ
り。一身をやどすに不足なし。がうなはちひさき貝を
好む。これよく身を知るよりなり。みさこは荒磯
に居る。ずなほち人を祀する、がゆゑなり。われ又か
くのことし。身を知り世を知れば、願はざまじらば
ず。只まづかなるを望とし、愁なきを樂とす。すべて世
の人のすみかを作らば、ひかならざし。身のため

結べり 庵をつくるを
いふ

誰をかすゑん 誰も居
らしむべきものなしと
なり
ねんごるなるを先とす
此方にねんごるに
きてくものを人情と
して先づ近づくるとの
意なり
かならずしも情あると
云々 人情として慈愛
と正直なるものを
み愛せざるの意なり
た糸竹云々 世人の
常として死を愛憎ある
ものなれば、音楽を友と
して心を慰むるがよし
との意なり

にはせざ。或ハ妻子眷屬のために造り、或は親昵朋友
のために作る、或は主君師匠、たよび財寶馬牛のため
にさへこれを作る。われ今、身のために結べり。人のた
めに作らず。故いかよとなれば、今の世のならひ、この
身のありさま、ともなふべき人もなく、頼むべきやつ
こもなし。たとひ廣く作れりとも、誰をかやどし、誰を
かすゑん。それ人の友たるものは、富めるをたふとび
ねんごるなるを先とす。かならずしも情あると、直な
るとをば愛せざ。たゞ糸竹管絃を友とせん。ハ志か
ず。人の奴たるものハ、賞罰のえなはだしきをかへり
み恩顧のあつきを重くす。更にはごくみあはれぶと

我身を奴婢云々
のことに心勞を免れ
安んずる方なきは
たゆからずしむら
然精進の心なり

手の奴云々
て特として手は
は休息するは
はあらずの心なり
を過ぎることなり
心づかひの心なり
常におりき云々
立働くは我身の
益の休息はなす

いへども安く閑なるをばねがはせ。たゞわが身を奴婢とす。るに志かず。もしなすべき事あれば。すなはちれのづから身をつかふ。たゆみならず。しもある。ねど。人をしてたがへ。人をかへりみるより。はやし。もしありくべき事あれば。みづからあゆむ。くるしといへども。馬鞍牛車と。心をなやますに。似せ。今一身をわがちて。二つの用をなす。手の奴。足の乗物。よくわが心にかなへり。心また身の苦しみを。知れば。苦しむ時。ハやすめつ。まめなる時は。つかふ。つかふと。ても。たびく。すぐさず。ものうし。と。ても。心を動も。事なし。いかに。いはんや。常にありき。常に働くは。養生なるべし。何ぞいた

いか他人の力をか
おのが力も働く可
然の衣麻の衾得る
機織りたる使用す
衣麻にも使用する
人にまじろはされ
せざるをもて。散衣
に耻づかしからず
意なり

おろそかなれども
のこく甘しむる
世を遁れ云々
世を遁れ云々
より怨も恐も
生命は天運に任せ
は食する念なく
はかなきもの如く
は物事たがひなき
におもはす。どの
意なり

づらにやすみをとらん。人を苦しめ。人をなやます。ハ又罪業なり。いかゞ他人の力をかすべき。衣食のたぐひも。た同じ。藤の衣麻の衾得るに。志たがひて。肌をか。くし野べのつばな。峯の木。の實。わづかに。命をつぐ。ばかり。かり。人にまじろ。えざれば。姿を耻づる。悔もなし。かて乏しければ。れる。そかなれども。なほ味を。あまくす。志べて。かやうの。たのしみ。富める。人に對して。いふには。あら。だ。たゞ。こが。身一つにとりて。昔と。今と。を。たくらぶ。る。ばかり。なり。おほか。た。世を。遁れ。身を。捨て。し。より。怨も。なく。恐も。なし。命は。天運に。まかせて。惜ま。だ。厭は。ぞ。身。を。ば。浮雲。にな。す。ら。へ。て。頼。ま。ず。ま。だ。し。と。せ。せ。一

周梨特法云々 物事健忘なりし人なりこの身を
 をひきて長明の心なる
 いたく卑下したるなり
 くるはせむるか 妄心の
 佛道を修する心からそ
 せしむるか 自からそ
 の心を資めたるなり
 不請の念佛 心定な
 は請けたまはらぬも佛
 を唯かたはらに舌根
 をやどひて念佛 三遍
 唱へたりと云ふ
 建暦 順徳天皇の年號
 三月の異名なり
 月影の云々 一首の意
 は飽かなくはつらぬ山
 の端に入るはつらぬ山
 もふに常にかゝりて
 りては常にかゝりて
 をみたるものなりとい
 ひては浄名居士の
 とくよく佛道を修行し
 えて心鏡の曇ることな
 く照えざる佛の光りを
 と帯ひ求めたるなり

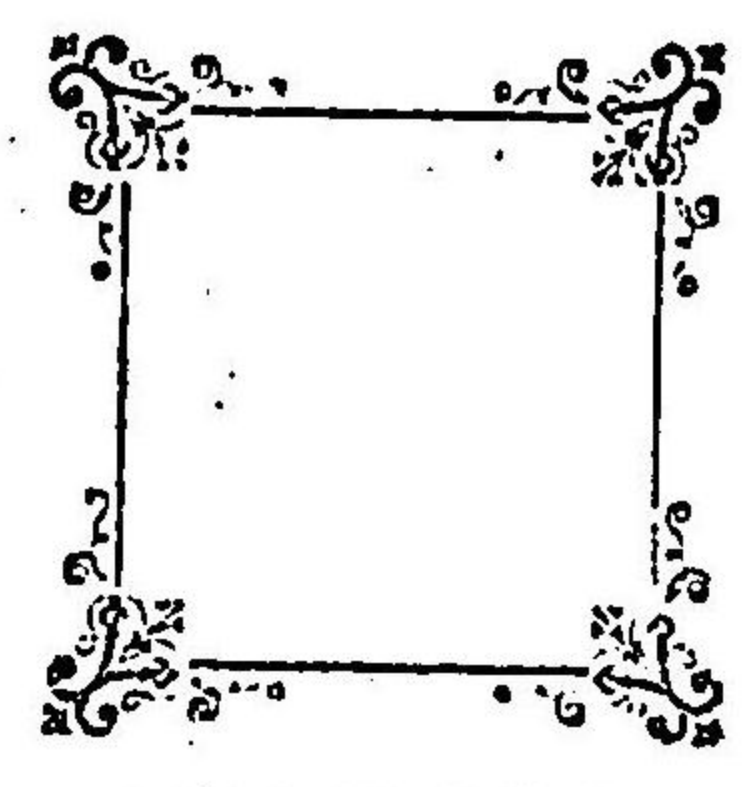
わづかに周梨特法がたこなひにだもおよばずもし
 これ貧賤のむくいのみうからなやますか。はた妄心
 の、いたりてくるはせるか。その時、心さらに答ふる事
 なした。たぐかたはらよ、舌根をやとひて、不請の念佛、兩
 三度を申してやみぬ。時に建暦の二とせ彌生の晦日
 ごろ、桑門蓮胤外山の菴にしてこれをしるす。

月影は入る山の端もつらかりき
 絶えぬ光を見るよしものな

冠註
 傍解
 方丈
 記終

明治二十五年十一月十四日印刷
 明治二十五年十一月十四日出版

正價金拾五錢



冠註方解史記

版 權 所 有

註解者 星野忠直

發行者 圖書出版株式會社
 大坂市東區北久太郎町四丁目番外一番屋敷

印刷者 前野茂久次
 大坂市東區和泉町二丁目八番屋敷

發兌書肆 圖書出版株式會社
 大坂市東區北久太郎町四丁目番外一番屋敷

帝國大學卒業生大久保初雄編著

國文小辭典

●寸法小形 30x18 生立金文字 特別金三十錢 郵費別
●附録 國文小辭典 第六百頁 全部印刷 正價 金六十錢
本書は國語を學ばんと欲するの便利にもと思ひ和文軌
範文典史國文學普通國文學の諸書の辭句、歌語
などの個人に耳遠きものを取り又は古今同し詞
のいひよりなれど其意の異なるものをもとり
て併せ集め雅言を以てして解するに俗言を用ひ
たるものなりされば師につきて學びをなす人は
その下讀の材料となり訓練を削りて道を通ふの
こゝちありぬべしまた寫材僻色にありて師につ
く能はざるものは此辭典によりて自修すること
を得る其書なり其趣有ならざることは既に昨年
初版を發行して大に世の需用となり
明かなり 訂正増補し製本を細心し國語
今や又 訂正増補を研窮する諸君の心
に満足を得へんことを期せり希くは初版に倍し
益々愛讀あらんことを

帝國大學卒業

星野忠直先生校註

入心取物語

●全壹冊 附同本影印 正價拾二錢 郵費別
此書は、我邦小説の嚆矢にして、根基を支那
印度古書の體に取り公卿の息子一人の女子
を惹へる縁を叙述し時世を諷刺したるもの
なり且つ其文章簡潔雅馴にして後も人情の
眞實を穿ちたる其書なり源氏物語に比する
に尙は一層の觀あるを覺ゆ今回之を校訂註
釋し本文に大小段落を標記し難解の文意を
解し易からしめ假名遣を正し又他書に比し
て異同を示せり尋常中師範學校の生徒
諸君將て國文講習の諸君は眞に必讀の書な
り

帝國大學卒業

大久保初雄先生刪定標註

(近刊)

伊勢物語

●菊判 大正新製版 全一冊 正價非錢 郵費別
此書は中古の人の人情風俗俗格を知り國文を學
する其本と爲る書にて物語中隨一の書なるは人
の知る所なり而して此註釋書の中藤井高尙大人
の新釋を以て亦隨一とす然るに此書は、方今の
教育上に穩當ならざる所あるを以て大久保先生
其穩當ならざる所を刪定せられ且つ整頓に於て
新釋の他に増註せられたり中等教育の諸女學校
及び師範學校の女子部の教科用書には最も適切
無比の書なり

本居宣長翁著述

山崎美成大人頂書

(製本既成)

古事記

●上卷全壹冊 附同本影印 上下二冊特別
●下卷全壹冊 附同本影印 正價金五拾錢
●郵費別 二冊 金拾二錢 郵費別
●郵費代用 八金六拾錢 中級出
木に鳴く鶯。水に住む蛙。いづれか歌をよま
ざらんや歌の妙は不可言の處に存す我日本
文學の粹。是を拵て孰れにかあらむ其之類
の古今は上を高乘に廻り下は之を祖とする
ところにして歌中の中歌昔なり本居の翁之
を釋して古今體鏡と名く辨を説き妙をわけ
つらふ丁寧なりまいて美成大人の頭書に句
をあげて出處意蘊をつばらにしたるものな
れば其真伴たるや謂ふまでもあらす今回新
に印刷して江湖文學の士を益せむとす
一本を購ひ賜へ

帝國大學卒業
星野忠直先生校正

長歌集

特別正價金二十五錢
郵費四錢 製本既成

我帝國の文學年に月に隆盛に赴きおはよろ世にありとある國文の書とも新に招り巻となりて世にいでは然れど獨り長歌集に至りては未だ之に着手するものなし彼孝標朝臣の女の今世にあらはいかにはいなくかもはん又近きころ新体詩といふもの世にいできて我長歌の詞姿漸く將にくだけんとす是實に斯道に志あるもの、慨くおもふ所なり帝國大學和文科専修星野忠直先生深く此に感ありてこれひ先づ長歌規則を校正せられたるをもて我社乞ふて之を上木なしぬ我文學界に遊ぶ諸君は熟讀の素を養ひ玉は、眞個に趣味あるの歌を詠みいづべし江湖の諸君購讀の一大好書たるを知り玉は、幸甚

本居宣長翁著述(第一)

文苑

特別正價金
紙數四百冊 印刷既成

卅金八錢

日本文章の格調と國語學の神髓とを知らんとせば言葉の玉緒を一讀するに如かず本書の良典なるは今更喋々を俟たず然かるに從來の刻本は大本數卷にして緋閱に便ならず且其價高貴なるを以て斯道熱心の諸彦をして購讀に躊躇せしむの憾あり依て本社之を活版に付し縮冊合巻して前記の廉價を以て頒賣す幸に本社の微衷を嘉し希く一本を需て本居翁が心血を灑かれしを味ひ玉へ

